発掘調査の概要

藤原宮跡朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次）

朝堂院は大極殿院の南に位置しており、回廊に囲まれた東西235m・南北320mの空間です。内部には、中央広場である朝庭を取り囲むように12棟の朝堂が配置されています。ここでは官僚が仕え、政務や儀式を執りおこなっていました。

奈良文化財研究所では、この朝堂院朝庭の空間利用のあり方を検討するとともに、下層に存在する藤原宮造営期の実態をあきらかにするために、近年、朝庭の発掘調査を継続的に進めています。

これまでの調査では、朝庭は最終的に拳大の礫を敷き詰めて整備されていることがあきらかになっています。更に、その下層の調査では、藤原宮の造営にかかわる遺構が見つかっています。なかでも注目されるのは、南北に流れる運河や沼状の遺構です。現在、各遺構から出土した多量の木屑を整理して、分析を進めているところですが、これらの遺構は木材の搬入経路や加工場所として利用されていたのではないかと考えています。もう一つ興味深いこととして、下層から複数の掘立柱建物が見つかっています。これらの建物群の全貌は不明ですが、藤原宮造営にかかわる仮設の建物群と想定しています。

調査区全景（南東から）

こうした成果を受けて、今年度は、昨年度の発掘調査区（飛鳥藤原第174次調査）のすぐ北側に調査区を設定し、2013年4月8日から発掘調査を実施しています。調査面積は1,430㎡です。

今回の調査でも、一面に広がる礫敷を検出しました。くわえて調査区中央では、東西方向の溝が見つかりました。この溝はこれまでの調査でも確認しており、溝の中に礫を詰めた暗渠（あんきょ）であることがわかっています。当時の人々が礫敷の排水にも気を配っていたことがわかります。

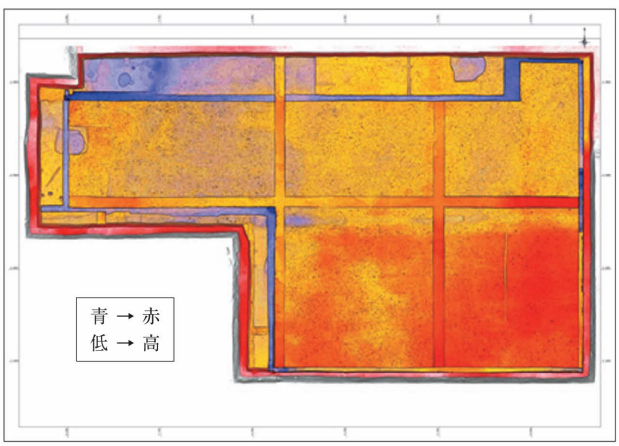
また、昨年度同様、3次元レーザー測量をおこない、礫敷上にあらわれた微地形を立体的に記録しました。その結果、調査区の南半が高く（下図の赤色の部分）、西半が低くなっていることがわかりました（青色の部分）。当地周辺は南が高く北が低い地形となっているため、調査区南半の高まりはこうした地形を反映しているとともに、東西方向に走る排水溝への集水も意識しているように感じられます。

いっぽう、調査区西半は、下層に斜行溝等の存在が推定される位置にあたります。下層に大きな溝や土坑等がある場合、その上層の地面が沈下する現象がみられることがあります。今回の計測結果も、下層に遺構があるために、上層の礫敷が沈下したものと読み取ることができるのかもしれません。

5月末をもって当調査は一時中断していますが、秋から再開し、部分的に礫敷の下層を調査する予定です。掘立柱建物群や沼状遺構の広がりを確認し、それらの性格をあきらかにしていきたいと思います。

今後の調査の進展にご期待ください。

（都城発掘調査部　和田 一之輔）



朝庭礫敷面の標高グラデーション図（上が北）